

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

家族・民族・国家のディスコース：
社会の連続性と非連続性を作りだす仕組み：
機関研究：
「包摂と自律の人間学」領域 中国における家族・
民族・国家のディスコース（2012-2014）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 韓, 敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5494

家族・民族・国家のディスコース ——社会の連続性と非連続性を作りだす仕組み

文
韓 敏

機関研究 ● 「包摂と自律の人間学」領域

中国における家族・民族・国家のディスコース (2012-2014)

研究目的

中国において、家・族・民族・国・国家などの概念は、複合的社会関係を生みだす仕組みとして機能してきた。また、中国の歴史を貫き、社会構造の連続性と非連続性を作りだす重要な要素でもある。上記の概念の中に家・族・国のような、歴史において中国人が自ら形成したものもあれば、家族、民族、国家のように外部から導入され、制度化されたものもある。王朝体制から共和制、社会主義国家へ、農耕社会から工業化・情報化社会への移行のなか、上記の2種類の概念は複数の主体によってさまざまな状況に応じて構築されている。グローバル化が進む近年、これらの概念は開発、福祉、移動、観光、文化遺産などにおいて、人びとの関係や行動パターンを規制するディスコースとして再編される局面をむかえている。

本研究の目的は、日本、中国、韓国、アメリカの中国研究者による共同研究を通して、中国の国民国家の成立と社会主義政権誕生以降の家族・民族・国家の概念と動態を民族誌的に検討するところにある。

研究内容と方法論

中国の歴史のなかで育まれてきた家族・民族・国家および家・族・国の概念および制度が、近代以降いかに人びとの関係や行動を規制する新たなディスコースとして再構築されてきたのか、そのプロセスおよび実態を検討するのがこのプロジェクトの目的である。具体的には、以下の3つの視点から取り組む。

① 個人・家族の視点

これまでの系譜・機能・規範を主な対象とする親族研究を踏まえたうえで、近代の西洋—東洋、社会主義ソ連—中国との関係性の中で家族ディスコースを考察する。その際、家族ディスコースを作りだす主体（政府、職場、父系一族のエリートなど）と実践する人びとに注目し、血縁、祖先、族譜、儒教、「生・熟」（人間関係の遠近）などに関連して、民衆の生活実践と語りを通して中国人の自己構造、愛情、死者追悼のあり方、移動、社会福祉を含む家族の動態を検討する。また、東アジアや海外の華僑・華人社会との比較を通して、中国の家族の特質を明らかにする。

② 民族の視点

中国の華夷秩序を踏まえたうえで、民族ディスコースが国民国家、都市化、文化産業化の文脈においていかに形成され、機能してきたかを考察する。具体的に言語、信仰、歴史遺産、移動、開発などの側面から、民族ディスコースを構築する側、実践する側、研究する側などを総括的に研究する（写真1）。

③ 国家の視点

中国発祥の概念「華」、「文明」、「天下」などを踏まえ、近代の国家ディスコースに焦点を当てて、国家と社会、国家と文明の関係がいかに維持されてきたかに注目し、中華文明、近代の西洋文明と社会主義的文明観との連続性と非連続性に

ついて、年中行事、冠婚葬祭、観光、文化産業化などの側面から考察し、国家ディスコースの機能と動態を明らかにする（写真2）。

企画の経緯：社会の連続性と非連続性に関する3つの先行研究

本機関研究はこれまでに実施してきた3つの研究プロジェクトの成果を踏まえたうえで企画されたものである。①民博の共同研究「中国の社会変化と再構築—革命の実践と表象を中心に」（2004-2006）では、一世紀にわたる近代の中国革命の過程において、革命の理念にもとづいてできた諸制度、新たな風習と伝統的なものとの間の連続性と断絶性を分析した（2009 韓）。②共同研究「中国における社会と文化の再構築—グローバル化の視点から」（2008-2011）では、グローバル化の刺激を受けながらも自分たちの集団、地域、



写真1 ミャオ族の正月「苗年」を迎えるためモチつき（2006年11月、貴州省雷山県丹江鎮郎档村、塚田誠之撮影）。



写真2 社会主義国家の新たな聖地、毛沢東の生家が現在レッド・ツーリズムの観光スポットになっている（2002年2月、湖南省韶山市韶山郷韶山村、韓敏撮影）。



写真3 徐氏一族の集慶楼の内部。これは世界遺産に登録された土楼群の中で最古最大の円形土楼で、徐氏18人の兄弟によって21年間をかけて1419年、明の永楽帝代に建てられた。外側は4階建てで、それぞれの階に53の部屋があり、階段は72か所ある（2007年、福建省永定県下洋鎮初溪村、鄧曉華撮影）。

エスニシティ、ナショナルリティを意識し、再構築すると同時に、グローバルなアリーナにおいてローカルなアイデアやモノを発信する可能性をも射程に入れて考察をおこなった（韓2010：18-19；2011：26-27）。③民博の研究フォーラム「グローバル化の中の文化伝承」（2011）では、中国社会科学院民族学・人類学研究所と協力して中国の民間信仰、芸能、文化、老舗の伝承に焦点を当て、国家、地域、市場と文化の担い手の側面から文化伝承の形態とそのメカニズムを検討した。

上記の3つの研究を通して、20世紀の中国革命による社会構造の断絶と連続および21世紀のグローカリゼーションの実態をある程度明らかにした。同時に家族、民族、国家、文化などの概念と制度が、一方で中国の歴史のなかで自律性を保ちつつ、他方で状況に応じて新たなディスコースとして再構築されていく諸相について、さらに深く細かく検討し、研究体制のさらなる国際性が求められていることを痛感した。

今回の企画は、以上の成果と課題を踏まえ、中国の社会関係に関する主要な概念である家、民族、国、国家について、歴史的かつ民族誌的な視点から比較研究をおこなうことを想定している。その際、これまでの研究プロジェクトで得られた国際的な人的ネットワークを生かし、中国、韓国、アメリカなどの中国研究者に参加を呼びかけ、中国社会科学院民族学・人類学研究所などと連携して、さらに広範な国際共同研究を進めていきたい。

世界遺産の登録・管理からみる家族・地域・観光業界・国家のインタラクションと競合

2012年5月19日民博で開催された機関研究の打ち合わせ会議において、国内のメンバーが集まり、本企画の問題意識の共有、ならびに研究の役割分担の明確化がおこなわれた。その際、本機関研究の海外協力者、当館の客員教授であるアモイ大学の鄧曉華が「地域から読み解く世界遺産のもたらした影響——福建省永定県の初溪土楼群を事例として」と題する講演をおこなった。本講演は、世界遺産に登録された中国福建省永定県の土楼をテーマとし、ユネスコ、国家、観光業界、村落社会間の絡み合いを検討したものである（写真3）。

福建土楼は、中国福建省南西部の山岳地域にある、漢族のサブエスニックグループの1つである客家やその他の人びとによる独特の建築物である。父系一族の複数の世帯がそこで生活、防衛している。12世紀から20世紀にかけて建てられ

たものがほとんどである。

1998年、永定県共産党委員会や県政府は、ドーナツ型の「変わった」伝統民居として知られる土楼を、ユネスコの世界遺産に登録する準備を開始した。2006年8月には初溪土楼群、湖坑・洪坑土楼群、高頭・高北土楼群などを遺産登録の範囲とし、2008年7月7日にユネスコの世界遺産として正式に登録された。その間の10年間、行政主導の土楼の遺産登録に向けての準備は、地域社会に道路などのインフラ整備、土楼や一族の歴史に対する誇りの高まりなどの効果とともに、さまざまな葛藤や矛盾をももたらした。土楼が世界遺産に登録されて

からも、村落社会は急激な社会変化の渦に呑みこまれることとなった。いままで自分たちの家、一族の所有物であった土楼は、世界遺産として登録後、県政府がコントロールするようになった。土楼の使用と管理の面で「他者化」が進み、村落社会には「失語」（さまざまな不公平に対して抗議や告発の声を上げてしかるべきマイノリティが発言しない）現象が生じた。そのため、初溪土楼群の住民による抵抗や葛藤が生じ、地方政府、旅行会社、村民という3つの利益集団の間で緊張関係や矛盾が起こった。また、村落内部の社会変化について、世界遺産としての土楼の所有・運営をめぐる国家・県政府と村落社会の相互関係に焦点が当てられ、土楼の住民による遺産管理の手法、利益追求のポリティクス、政府と村民のパイプ役である村長選挙の熾烈化が論じられた。

これらの話を通して、鄧曉華は、国家や県政府の発した文化遺産のディスコースと村民の生活実践の間の兼ね合いを見ていく重要性を結論として指摘し、これまでに国家利益を優先してきた地方政府と旅行会社は今後、より「草の根の力」を見つめていくべきだと提案している。

上記のように本機関研究はこれまで民博でおこなわれてきた共同研究および機関研究の蓄積を生かし、国際共同研究を通して、中国の家族、民族、国家ディスコースとその実態を検討することにより、「包摂と自律の人間学」に関する理論的モデルを中国研究の側から提示するものである。

【参考文献】

- 韓敏 2010「中国のグローカリ化の人類学的研究」『民博通信』129：18-19。
—— 2011「グローカリ化の中の中国社会」『民博通信』133：26-27。
韓敏編 2009『革命の実践と表象—現代中国への人類学的アプローチ』風響社。
Han Min & N. Graburn 2010. *Tourism and Glocalization: Perspectives on East Asian Societies* (Senri Ethnological Studies 76), Osaka: National Museum of Ethnology.

かん びん

民族社会研究部教授。専門は文化人類学・中国研究。著書に『回応革命と改革：皖北李村的社会変遷与延續』（江蘇人民出版社2007）、*Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58, 2001)、編著に *Tourism and Glocalization: Perspectives on East Asian Societies* (Senri Ethnological Studies 76, 2010)、『革命の実践と表象：現代中国への人類学的アプローチ』（風響社2009年）、『大地は生きている：中国風水の思想と実践』（てらいんく2000年）など。